九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

手あてとしてのアート ： 復興ガーデンとバイオアート

知足, 美加子
九州大学大学院芸術工学研究院コンテンツ・クリエーティブデザイン部門 ： 教授

https://hdl.handle.net/2324/7172152

出版情報：pp.134-151, 2021-03-31. Social Art Lab, affilated with the Faculty of Design, Kyushu University
バージョン：
権利関係：©2021九州大学大学院芸術工学研究院附属ソーシャルアートラボ、著者、写真提供者（禁無断転載・複写）

KYUSHU UNIVERSITY

手あてとしてのアート ―復興ガーデンとバイオアート―

知足美加子（ＳＡＬ教員・彫刻）

はじめに

何らかの喪失、分断や破壊、「昨日とつながらない今日」を生きる人々を前にして、アートにできることはあるのだろうか。苛烈になる自然災害、新型コロナ感染症（COVID-19）拡大状況、見通せない未来への不安と無力感。私のアート活動をふりかえると、そのような無力感に対する何らかの「手あて」であろうとしているようだ。それは医学的処方というよりは、文字どおり「手をあてる」である。実際に手をあて、感じる。触れている自分の手の範囲から、対象に伝わるだけのあたたかさを届ける。正確には、届けようとする態度や行動、あがきである。それを対象がどう受け止め、展開していくのかは想定できない。「手あて」とは、一種の祈りや、無償の贈与に近い。

本稿は、ＳＡＬの復興支援プロジェクト「黒川復興ガーデンとバイオアート―英彦山修験道（ひこさんしゅげんどう）と禅に習う―」を中心に、社会包摂とアートについて論じるものである。具体的には、九州北部豪雨災害（２０１７年）の復興支援のためのアートガーデン制作、被災木を再活用した東屋（あずまや）制作、復興支援団体紹介小

冊子制作、アート活動のライブ配信について紹介し、見いだされた課題と知見を共有したい。これは、災害という亀裂によってダメージを受けた環境やコミュニティ、心のレジリエンスに、アート（美、創造性）がなしえる「手あて」を探した軌跡である。アートは、「絶望」に真に向き合うと、文脈主義闘争や経済システムを透過して、人間そのものが存在できる場を求めていく。本活動が人、植物、微生物など「いのちあるもの」を中心に展開したのも、その潜在的な希求なのだろう。環境と身体、そして心に宿るいのちが生きのびる方向への模索である。特に心のいのちを養うためには、創造する主体であるという自信、その喜びを分かち合うことが必要だと私は考える。

活動をふりかえる前に、これらが自然災害だけでなく、コロナ禍状況（２０２０年～）において展開したことを記しておきたい。自粛生活の中で、いのちのイメージは「おびやかされるもの」として語られ、生死の前において、アートは次第に無力化していくように感じられた。この時期、私は偶然テレビに映し出された医学出身の美術家、ヴォルフガング・ライプ（１９５０年～）の言葉と映像に救われた。彼は20年以上かけて集めた花粉を作品の素材にしている（図1）。

> （前略）危機は大きければ大きいほど、人類に新しい未来をもたらし、どこか他の場所へ向かい、他の何かを見つける手助けをしてくれた。想像しえたものの彼方に、私たちは見つける。新しいありようと生き方を。私たちが望むものと、私たちが人生に望むもの。大切なこととそうでないこと。慎ましさ、謙虚さ。自分自身と他の人たちに対する、世界に対する、自然に対す

（図1）Wolfgang Laib《ヘーゲルナッツの花粉》2013年　出典:MoMA美術館HP（2021年1月9日取得）
https://www.moma.org/calendar/exhibitions/1315

る、宇宙に対する、全く違う関係。自分自身と世界への異なる願い。新しい未来の新しいビジョン。[*1]

ライプの言葉から、コロナ禍や自然災害への不安の根底には、目に見えないものによって「対象との関係性が変容することへの恐れ」があるのだと気づかされた。只管に花粉を集める彼のふるまいの先には、光にあふれた野原の草花が揺れ、染み入るように美しかった。変わらぬ植物の営みの静けさと、鎮魂の相があった。そしてそこには自然の循環は未来に続くという予感があり、その恒常性と永遠性に心が支えられた。私が復興支援の核にガーデンを配したことに通底する願いを感じた。

(1) 復興ガーデンの共創

「被災地」や「地域社会」という言葉について、その現実の全てを網羅できないことをまず確認しておきたい。それらは無数の経験、記憶から生まれる動的なイメージが重なり合って存在する。もちろん現実も含むが、人間の意識の「場」もさす。だからこそ現地に足を運び、少しでも想像力の枝葉を伸ばし、意識の網目を増やすことが重要だと私は考えている。メディア情報のみでは、報道量が減ると問題解決したかのような錯覚をしてしまう。この「黒川復興ガーデンとバイオアート―英彦山修験道と禅に習う―」の活動も、地域内外の方々と「現場で感じることから始める」という現地研修（２０１８年７月）から始動している。

２０１７年の九州北部豪雨災害では、山地崩壊により約１０６５万㎥の土砂と、約21万㎥の流木が発生した。福岡県朝倉市、東峰村（朝倉郡）、添田町（田川郡）、大分県日田市は激甚災害指定されている。被災地では自然環境、特に木に対して負の感情が向けられがちだった。朝倉市の廃校利用の美術館

「共星の里 黒川ＩＮＮ美術館」には、流木だけでなく大量の巨石が流れ込んだ。命を失った方々もおられることから、巨石を撤去するか、災害記憶伝承のために残すかについては複雑な地域感情が錯綜した。災害直後の黒川を訪れた私は、苛烈な被災状況に圧倒されながらも、なぜかここが「美しい庭として再生している」というイメージが心に浮かび離れなかった。

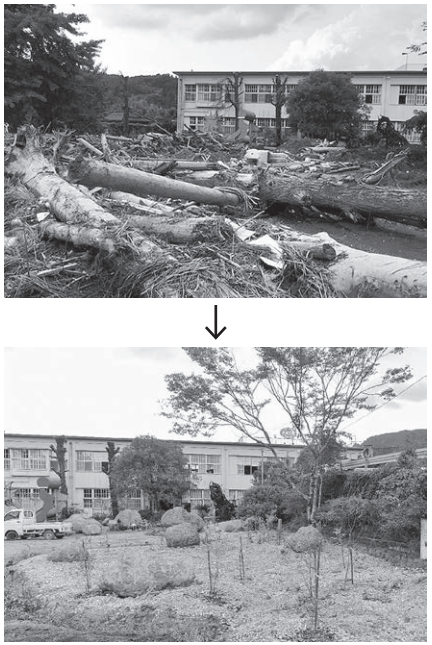
黒川は英彦山修験道文化圏に属し、室町時代より英彦山座主院を大切に守ってきた地域である。修験道の中心は自然信仰（山川草木悉皆成仏）[*2]で、水、植物、石、土（微生物）、気配にも神仏を見いだした。英彦山内には禅庭が複数存在する（知足は英彦山山伏の子孫）。災害由来の岩を美しい庭の要素としつつ、植樹によっていのちの循環を再生するという発想は、英彦山の雪舟庭園（１４７６年）から得た。共星の里の柳和暢、尾藤悦子も同様の直感を受け取っており、個人的にはこの企画が自然からの呼びかけに応えて始まったように思えてならない。

まずは企画・実行のプロセスを通して、多様な人々が関わるよう努めた。複数の（創造する側としての）主体を「見える化」し、互いの意識の中で居場所を与え合いながら、喜び合うためである。そのためにまず、禅僧であり国際的作庭家の桝野俊明（１９５３年～）を黒川に招き、「石心を読む」といった禅における自然との対峙の在り方を学んだ。地域内外の参加者は現地踏査や岩石群の画像コピーを基に、模造紙を囲んで複数の作庭案を練った（２０１８年10月、11月）。土壌の生態系が崩れたためか、共星の里野外スペースの樹木が枯死する状況が続いていた。そこで、大学授業の中で禅庭や地域特有の植生の調査を始めた。ガーデンの巨石や側溝のレイアウトと並行して、ＣＧで季節ごとの色味をシミュレーションしながら、学生たちと植栽計画を立てていった。

ワークショップは複数回にわたり、参加者も一様ではなかったが、どの回も当事者の話を聴く機会をもうけ、被災地に寄り添う意識を継続した。また、地上のデザインばかりでなく、目に見えない土の中

の菌根菌（植物の根と菌との共生体を作る）のネットワークや空気の循環についても言及を続けた。参加者には、生態学者のスザンヌ・シマードの講演映像『How trees talk to each other?（森で交わされる木々の会話）』（２０１６年）を視聴するという事前学習をお願いした。シマードは、「森は、ただの木の集合体ではなく、ハブとネットワークを備えた複雑なシステムです。幾重にもなる菌根菌のつながりが、木々をつなげ、互いを交流させ、それが情報交換や環境適応の手段となり、森の再生能力を高めています」[*3]と語っている。因（ちな）みに私は、このような森のシステムこそ、人間の共生社会のイメージモデルではないかと考えている。

こうして多様な庭の企画案を組み合わせ、「風と水と土の道・再生のための庭づくりワークショップ」（２０１９年９月）の中で具現化することとなった（図2）。被災した住宅廃材や流木は、土壌改良のための消し炭に変え、植物の新しい命として再生することで鎮魂につなげた。炎天下での消し炭づくりや側溝掘り、剪定（せんてい）作業と、汗まみれの重労働が続く。それなのに夢中になり、時間を忘れる。最も印象深かったのは、各参加者に「自分の木」として一本の苗木を選んでもらい、植樹したことである。自分のいのちのバトンを、木に受け取ってもらったような感動があった。この時、一人の学生が、「木を植えることは未来を思うこと」と語ってくれた。参加者の想像力が、植樹によって人間を超えた時間につながったのである。自然の循環は、変化を繰り返しながら、その創造性と永遠性を失うことはない。災害という亀裂によって過去との連続性を失ってしまった時、救いとなるのは、「自然の再生力と永遠性」なのだろう。変わらずに咲く花や蛍火は、未来にもこの時間が続くと信じさせてくれる。



（図2）共星の里野外スペース2017年→2019年

共創的ワークショップで大切なことは、初期の段階から、参加者を「発案する主人公」として尊重することである。複数の創造する主体を「見える化」し、互いの意識の中で重ねていくマネジメントに時間をかける必要がある。具現化した時の美的ビジョンや幸福なイメージを、できるだけ具体的に関与者と共有し続けることである。それができるならば、プロジェクト参加者の集中力や能動性は持続し、周囲を巻き込む。単なる企画案で終わらずに具現化する可能性が開く。「やらなければいけない」という義務感を、「楽しいからする」という能動性に転換するのがアートである。アートの美と善、喜ばしさは人を惹きつけ、自他のいのちのエネルギーを呼びさます。

人間は、創造の主体として企画から関わったものには、不思議な愛着が生まれるものである。復興ガーデンプロジェクトは、その愛着をきっかけとして、「被災地を第二の故郷のように感じ、関わり続ける関係人口[*4]を増やす」という意図があった。ただ、注意するべき点がある。それは被災者の方々が傷つき、生活再建で精一杯の状態であることへの配慮である。「関われば余計な負担が増える」という恐れは、被災者たちを苦しめるだけである。何か始めることより、メンテナンスしながら継続していく負担は、想像以上に重い。彼らが望むことを見極め、その小さな灯火（ともしび）を炎にすべく、支援者側が助力・実行するという姿勢を示すことが大切である。特に初動時は、被災者の負担を少なくし（アドバイザーや協力者など）、彼らが自由意志で関われることが望ましい。時に支援者は、被災地側から心ない言葉を投げかけられることも覚悟しておかなければならない。そのような時も、被災者の心情や地域事情に対する自分自身の想像力の乏しさを改め、敬意をもって被災地に関わり続けるしかない。美しいビジョンが

共有されていれば、互いに帰着する結節点を見失わないですむ。地域の中で少しずつ理解者、味方をつくる。つながりが宝である。プロジェクトの中で生まれる喜びによって信用が深まれば、地域協力者＝カウンターパートが増えていく。たとえプロジェクトが終了したとしても、カウンターパートの存在が地域での活動を高め、継続する力となる。

（2）アートマネジメントにおける関係性

復興支援とは、被災地の外からするものとは限らない。被災地内でも、切迫した必然性に裏づけられた多様な復興支援活動が存在する。このような地域発信の活動をネットワーク化することは、意識を継続し、復興をまちづくりにつなげる上で重要である。意外にも、地域内の復興支援団体は、互いの活動を深く知る機会が少ない。自らの活動に手一杯であることはもちろん、「自分よりも被害が大きいところがある」などの複雑な心情が潜在的な足枷（あしかせ）となっている。高齢者が多い地域では、情報ディバイド（通信技術の格差）の問題もある。災害後2年という仮設住宅が廃止される時期も近づき、被災者たちの横のつながりの担保は課題であった。そこで、被災地における復興支援活動をひとつの冊子として共有する活動を、庭づくりと並行して取り組んだ。こうして、社会人と学生による編集部を立ちあげ、21団体を取材して記事を書き『復興支援団体紹介小冊子〝かたり〟』（2019年）としてまとめることとなった。これは、被災地内の様々な活動を、大学という中立的な立場を活かしてつなごうとする試みである（図3）。

若い世代が被災者の経験や現状を「傾聴し、文字にする」ことは、想像以上の善なる化学反応を生み出した。学生たちの想像力は具体性に根づいたものとなり、その本気度は格段に増していった。大規模災害を前にして、被災者たちが何を考え、実際にどう行動したのか。その軌跡についての語りは、災害

対応に関するデザインのヒントと、次世代の幸福への願いに満ちていた。工夫したことは、復興支援団体ごとに「私たちができること」「私たちがのぞむこと」を紹介し、地域内外から関わりやすくした点である。地域外の方々には、被災地のニーズを知り、支援したい気持ちを行動に結びつける契機となる。また、被災地の方々には、相互理解と連携のネットワークづくりとして活用できる。被災地だけでなく、全ての地域における防災意識の継続と深化に役立てることを念頭に編集を行った。

現在もこの小冊子は、各支援団体の名刺代わりに活用され、助成金獲得などに力添えしている。この内容に触発された福岡青年会議所が新たな活動を行うなど、その後の広がりも見られる。アート作品が、人々の解釈によって多様な意味をもち一人歩きしていくように、活動の本来の価値は、その二次的な広がりの中にあるのかもしれない。ある活動から得られたタネが、その後の各参加者の新たな行動として芽吹いたかどうか。このような観点が評価指標のひとつになれば、参加者人数や経済効果だけではわからない、プロジェクトの真の価値が見えるようになるだろう。

黒川復興ガーデンプロジェクトと『かたり』に共通することは、環境や他者に対して自分の方の態度を合わせ、よくみて、よく聴き、深く感じることである。そこから生まれる意味を表現すること。それらを重ね合わせ、美しいビジョンを創造し、繰り返し互いに共有することである。この動的な調整作業は、前述した菌根菌のハブとネットワークの姿に似ている。複雑で創造的なつながりを、美しく善なる方向に調整し続けることを、私はアートマネジメントと呼びたい。

私がこれらのプロジェクトで想定した関係性は、人と人だけではない。動植物、環境の中に意識の主

（図3）『復興支援団体紹介小冊子〝かたり〟』
九州大学ソーシャルアートラボ 2019年

体があると想定している。それらに主体があるかどうか証明できないが、イメージとして自分の中に存在させることが鍵である。紡ぐビジョンが、互いにとって善であり、幸福に向かうものなのか検討する「水平な関係性」を構築することできるからである。その関係性は、修験的な言葉を使うと「習合（しゅうごう）」[*5]であろう。習合とは、異なるものが敬意をもって習い合うことで、独立性を保ちながら共存を目指す態度である。互いを観察し認め受け入れ、居場所を与え合う。2が1になる「統合」ではなく、2が2のままである「重なり」に近い。習合は、異なるものの間の「中立」であり、動きながら緊張を保ち続ける態度である。複雑な葛藤状態はストレスフルかもしれないが、状態を維持するほど想像力は細やかになり、これまでにない新しい創造が生まれる。0から1が生まれるのではなく、1と1が向かい合う中立地帯に新たな1を存在させるのである。創造を生むための水平な関係性とは、あらゆるものに敬意を払うことから生まれる。

復興支援における水平性は、支援しているようで、実際はエンパワメントされていることを自覚した時から始まるようだ。復興ガーデンの植栽計画を行った学生たちは、共星の里に実際に訪れた際、黒川地区の環境、人の優しさ、食べ物の美味しさに感動したという。彼らは地域の方々のために、災害からの復興を表現するアートパフォーマンスを行う企画を立てた（2019年・図4）。巨石群や生き残ったイチョウの木をプロジェクションマッピング（空間に映像を投影し視覚効果を与える技術）などで舞台要素とする計画である。黒川地区は約100世帯いた住民が、災害後約20世帯まで激減している。天候不順な年末の日暮れだったこともあり、観にきてくれる

（図4）口羽雅晴、山中りり花、逆瀬川陽介、國弘暉《共生》2019年

方がいるのだろうかと危惧していた。しかし当日、懐中電灯片手に20人近くの地域の方々が訪れてくださったことには驚いた。「夢みたいにきれいだったよ」という感想に、学生たちの方が涙を流す場面もあった。出会わないはずのものが出会い、双方が贈与し合い、その間に前を向く力が生じる。この学生たちは、その後も復興支援を継続している。現前の世界から受け取った「感」を「知」に変え、その知を「身体化」する。分かち合った喜びの記憶は、目指すビジョンを強化し、新たな取り組みにおける複雑な調整や、困難に挑む勇気となる。このようにアートにできることを心身で実感することが、アートマネジメント人材を育成する第一歩であろう。

（3）創造による被災木の再生

平成29年7月九州北部豪雨は、大規模な山地崩壊と流木被害をもたらした。被災地における森や樹木に対する怒りや恐怖は、山間地住民や林業関係者をさらに苦しめた。私は、木に対する負の感情を少しでも緩和するため、「被災木再生プロジェクト」として被災木を再活用する創造活動を始めた。地域への住民たちの愛着を維持し、森と暮らしとの調和や、グリーンインフラ[*6]としての森づくりへと議論を進めるためである。

災害直後、土砂で真っ白になっている大きな樟（くす）の流木に出会った。被災地では、その樹齢とほぼ同じ144年も続いた複数の小学校が統廃合された。彫刻家である私は被災した子どもたちのために、この流木で水の守神としての「龍」の木彫を制作した（図5）。新設の杷木（はき）

（図5）知足美加子《朝倉龍》2018年

小学校に設置されたところ、子どもが「この龍がいるから、もう災害が起こらないような気がする」と言ってくれた。この言葉を、私はどのような功績よりも嬉しく、誇らしく感じた。ほかに子どもたちとのワークショップとして、流木による栞や時計作りを行っている。また、この災害で英彦山山嶺の樹齢約300年の山桜が倒木した。地域の方々の願いをうけ、この山桜で英彦山守護童子を彫っている（図6）。私は次第に「倒れた木のいのちが、愛され尊ばれるものとして再生する」という可能性が、アートにあることを確信するようになった。途切れたものを、紡ぎ直す力である。

被災木（杉）を再活用して、黒川復興ガーデンに東屋《泰庵》を制作するという企画も、このコンセプトから始まっている。地域内外の方や、離村した被災者の方が、自由に訪れ静かにたたずむことができる居場所を作りたかった。東屋の製材・設計施工は杉岡世邦（杉岡製材所）と池上一則（大工池上算規）を中心に進められた。彼らは、2016年の熊本震災復興支援（板倉の家ちいさいお家プロジェクト）で力を合わせたメンバーである。その翌年、九州北部豪雨災害が発生し、杉岡所有の森は甚大な被害を受けた。杉に対するネガティブな感情は、彼を苦しめたという。「木（杉）の文化」を再評価するためには、杉がもたらす美しさを形にすることが必要だった。しかし、コロナ禍の中、一般参加者を募ることができず、関係者のみ

（図6）知足美加子《花開童子と福太郎童子（吉木のヤマザクラ）》2019年

（図7）《泰庵》共星の里野外スペース2020年

での東屋制作となった。[*7] 杉材は、釘を使わずに、手刻み・手鉋の木組みで組み立てられた。川石を拾い土間に敷き詰め、石灰とにがり、赤土による三和土で仕上げた。

屋根を打つ木槌と、土間の石を叩きしめる音が、いつの間にか同期していく。その響きによって環境と人の心がつながり、調和していく様は、実に美しかった（図7）。「絶望」を「前に向く力」へと転換する力は、おそらくこのような「創造するプロセス」の中に宿っているのだろう。

（4）コロナ禍における「黒川庭園と喫茶アート養生会」

作庭家の枡野俊明によると、禅庭はそこから発想した心の表現を「あなたはこんなことに気づいていたのか」と互いに伝え合う場所なのだという。[*8]「黒川庭園が完成したら、お茶を飲みながらアートを楽しむ会を開きましょう」と、よく参加者と話していた。しかし、新型コロナ感染症拡大状況は依然として収束せず、対面でのイベント開催は難しかった。そこで、インターネットライブ配信による「黒川庭園と喫茶アート養生会」（2020年）を行うこととなった。無観客公演で行われたアート活動や交流の様子を、地域内外の方々とインターネット上で鑑賞し、感じる心を分かち合うものである。[*9]

始めに日本茶インストラクター・山科康也による実演指導を行い、画面の向こうの鑑賞者と茶の「香り」を同時に味わいながら、互いの意識空間をつなげることにした。黒川に縁が深い英彦山修験道では、茶を人と万物の聖霊をつなぐものとして位置づけている。[*10] また茶とアートが共に「生きる力を養う（養生する）」ものであると考え、タイトルに「喫茶」を配している。[*11]

続けて、被災木を再活用した東屋《泰庵》の制作過程映像を共有し、制作関係者や自然科学者とで意見交換を行った。[*12] 森林圏生理活性科学を専門とする清水邦義が、杉材住宅が疫病の感染率を下げる可能

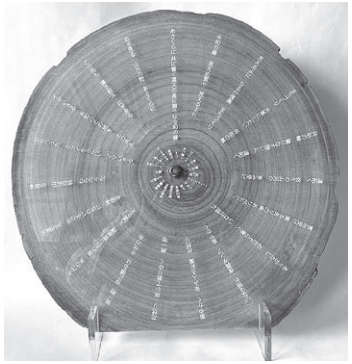
性について言及したことは、コロナ禍において印象的だった。

次に、被災者の方々と制作した《短詩五七五、連句の円環》（図8）の報告を行った。これは、被災地の自然をテーマに詠んだ短詩五七五の下の句を、次の方の上の句につないでいくという作詩のリレーである。[*13] 前の方が詩にこめた思いを想像し、受け止め、それを次の方にたくしていく。心の受容と委託が繰り返される様子は、文化の営みに通じるものがあった。自粛で動けない中、渡された創造のバトンに「心の泉が再び湧き出した」と感謝する参加者もいた。「あさくらに」から始まり終わる19の短詩を、『かたり』の表紙のイメージに重ねた木の年輪の上に刻み、回しながら紹介した。対面のグループワークが難しい状況でも、時間をかけて創造のキャッチボールを行う仕組みをつくれば、意識上の共創空間が生まれることがわかった。

さらに、朝倉市の普門院と共星の里で事前に行っていた活動を映像で紹介し、制作者がライブでコメントを述べた。ライブ配信の視聴者は、コメント欄に感想を送ることができる。それをライブ中に紹介することで、同時性と双方向性を担保した。

普門院で行われた「音と身体のワークショップ―朝倉の子ども達と」（図9）に関連して嬉しいことがあった。それは、収録の前に、普門院や地域の方々が自主的に清掃活動を行ってくれたことである。

（図9）「音と身体のワークショップ」普門院2020年



（図8）《短詩五七五・連句の円環》2020年

土砂が流れ込んだ境内の印象は一新され、映像を観た被災地の方が「（被災した）普門院とは思えない」と感想を送ってくれたほど輝いていた。アートプロジェクトの真価は、こうした自主的な活動の起点になりえたかどうかにあるのだろう。

普門院の中で、子どもたちは学生が制作したアニメーション鑑賞や、子どもたちの誕生日からプログラムが展開するジェネラティブアート、AR（拡張現実）ジャグリングのパフォーマンスを楽しんだ。子どもたちは「身体表現ワークショップ」の中で、バレエ講師の永松美和と一緒に自然の中にある動きをまねしながら、自分の存在を深く感じ確かなものにしていく。彼らは、枝を持って木になりきり、木の気持ちを内面から感じていた。次のワークショップは、作曲家のゼミソン・ダリル（九州大学大学院芸術工学研究院助教）の「音狩り」である。風、水、虫、鳥、木、石の音をよく聴き、創造的に再現する。印象的だったのは、子どもたちの自由で本質的な表現力である。アリが歩く姿を観察し、小さな声で「かかかか…」と表現する子。「水は探さずとも、木や身体の中に流れている」と言う子。自然や他者と関わろうとする時、まず敬意をもってよく聴き、観察することの大切さを子どもと共に学んだ。

ライブ配信の最後は、共星の里で行われた無観客公演・デジタル枯山水『調身・調息・調心』（図10）とアートパフォー

（図10）密岡稜大『調身・調息・調心』2020年

（図11）口羽雅晴《共生 -tomoiki-》2020年

マンス《共生（ともいき）》（図11）の映像紹介とトークである。前者は、黒川庭園の巨石を活かしながら、枯山水をデジタル的に表現している。静かにたたずむと周囲に水紋が広がるというインタラクション（相互作用）がある。後者は、豪雨災害前の日常、災害の苦しみ、そこからの再生の物語が表現されている。豪雨災害で失われてしまった「蛍」がとぶ風景を、プロジェクションマッピングで校舎に再現した。パフォーマンス中に植えたユーカリ（花言葉、再生）は共星の里で生き続けている。被災者の方から「あの光景をみて、黒川の活動を続けてきてよかったと思えた」「災害前の蛍の乱舞の美しさを思い出した」というコメントがあり、感情の連続性をアートが紡いだことを実感した。

おわりに

本稿では、災害からの心の復興について、「手あてのアート」としての実践と知見を紹介した。心のいのちを養うためには、創造する主人公であるという自信、その喜びを分かち合うことが重要だと私は考える。そのためには、複数の創造する主体を「見える化」し、互いの意識の中で重ねていくマネジメントに時間をかける必要がある。出会わないはずのものを出会わせ、贈与し合うプロセスを創出するのである。プロセスの中で、幸福な美的ビジョンを共有し続けることができるならば、プロジェクト参加者の集中力や能動性は持続し、具現化する可能性が開く。アートマネジメントで大切なことは、創造のキャッチボールを行う仕組みをつくり、意識上の共創空間が生まれる状態を保つこと。中立的姿勢を維持しつつ、つながりを調和させ、美しく人道的なものへと導くことである。プロジェクトや人材育成の真価は、ある活動から派生した新たな創造の主体と活動の中にある。分かち合った喜びの記憶は、目指すビジョンを強化し、複雑な調整や困難に挑む勇気となる。「相互交流による創造の喜びを身体化する」

ことが、アートマネジメント人材育成を推進する力となる。

本プロジェクトが目指したビジョンは、複数の創造的主体が重なり、心を贈与し合う共生社会である。人間が「未来を創造できる」という自信を取り戻すような呼びかけや励ましが、社会包摂とよばれる動きだろう。菌根菌のつながりが木々を交流させ森の再生能力を高めるように、災害後の調和のためには、調整を続けるハブとネットワークが必要である。その結節点（ハブ）を担うアートマネジメント人材は、今後、重要性を増していくであろう。

また、本活動を通じて得たものは、自然災害の傷を癒すのもまた自然だということである。過去との連続性を失ってしまった時、救いとなるのは自然の循環が未来に続いていくということ。その「自然の再生力と永遠性」であった。

沖縄の彫刻家であり平和活動家の金城実（きんじょう）（1939年〜）に面会した事を思い出す。金城は、沖縄の壮絶な嵐の後で、最初に芽を出すのはクワの木だと教えてくれた。彼は、打ちのめされたものほど強い再生の力、抵抗の力が宿っていることに気づいたという。「台風の後の樹木に宿る〝抵抗の遺伝子〟に気づかないのか。思想と魂を受け継ぎ、気位と品格を自覚することだ。（中略）抵抗を具現化し、絶望を越えることは、これからの君のミッションだ」という言葉を私に残した。[*14] 環境問題や災害の苛烈化、疫病の蔓延。私たちは真の絶望に向き合わざるをえない。しかしその中にこそ、強い再生の力が宿っていると信じたい。

注

1　ヴォルフガング・ライプによりＮＨＫＥテレ「日曜美術館」に寄せられた詩『花粉を集める』（訳、小野正嗣）より引用（２０２０年５月31日放送）。

2　経典『大般涅槃経（涅槃経）』（約４世紀）に「一切衆生悉有仏性」という句があり、これが日本において心をもたない草木国土も成仏するという「草木国土悉皆成仏」「山川草木悉皆成仏」という言い回しとなったという。（末木文美士（２０１５）『草木成仏の思想 安然と日本人の自然観』サンガ文庫pp.17〜20）

3　Suzanne Simard. 2016. “How trees talk to each other?”
https://www.ted.com/talks/suzanne_simard_how_trees_talk_to_each_other?utm_campaign=tedspread&utm_medium=referral&utm_source=tedcomshare　（２０２１年１月９日最終確認）

4　地域や地域の人々と多様に関わる地域外の人材。地域づくりの担い手。

5　神仏習合とは、日本固有の神の信仰と仏教信仰とを融合・調和するために唱えられた教説。

6　国土交通省（２０１５）『第４次社会資本重点整備計画』

7　科学研究費補助金（JP 18H04152、代表：佐藤宜子）の助成を受けている。

8　枡野俊明（２０１１）『共生（ともいき）のデザイン　禅の発想が表現をひらく』フィルムアート社p.24

9　以下のメンバーが参加した。あさ・くるこども自然スコーレ［松本亜樹ほか］／九州大学学生［田中圭太郎（短詩作成支援アプリケーション）、密岡稜大（デジタル枯山水）、山口健人（アニメーション）、嘉松峻矢（ジェネラティブアート）、口羽雅晴（パフォーマンス）、森崇彰（ＡＲジャグリング）］／聞き手［白水祐樹（ＳＡＬスタッフ）、村谷つかさ（ＳＡＬ学術研究員）、栗山斉（九州大学大学院芸術工学研究院助教）］

10　日本大蔵経編纂会（１９１４〜１９２０）「修験一派引導作法一巻附位牌霊供茶湯次第」『日本大蔵経第37巻宗典部修験道章疏２』p.３６４

11　明庵栄西（１２１１）『喫茶養生記』

12　杉岡世邦、尾藤悦子、柳和暢（泰庵制作）、清水邦義（九州大学）、岩間杏美（油山市民の森）

13　正式には五・七・五の長句と七・七の短句を一定の規則に従って交互に付け連ねる。

14　筆者による沖縄・読谷村でのインタビュー（２０１５年６月28日）

知足美加子　ともたりみかこ
九州大学大学院芸術工学研究院コンテンツ・クリエーティブデザイン部門教授、博士（芸術学）。彫刻家（国画会会員）。山岳修験道学会評議員（英彦山山伏「知足院」の子孫）。中越地震、東日本大震災、熊本震災、九州北部豪雨災害において、アートを通した復興支援活動を行う。